て、時代の趨勢に於いて扱つたり、概念的に位置づけるのでなく、天台の、少くとも融合していつた諸家の天台學の、思想を解剖し、融合の必然性或は可能性を示されれば、尙意義あるものとしたのではなかろうか。

この書は天台教學の本質に關する思想史の他に「天台智顗の淨土教」を收めている。現在において我々は智顗に「淨土教」がいい得るかどうかは未だ明らかにし得ないであろう。「淨土思想」となすべきではなかろうか。著者は「淨土教」とみて、そこに智顗が最高原理を追求していつた反面の、自己自身を如何に解決してゆくか、というより切實なる面を論じている。卽ち一つには淨土教學體系、二つにはそれと彼自身の實際の信仰の關係を考察する。前者、天台の淨土教は、曇鸞や慧遠のそれとは類型を異にし、般舟三昧の法門の完成とみなし、彼の維摩經研究の成果をとり上げている。後者に關しては慧思より教を受けて以後臨終にいたる間の心の遍歷を考察し「夢見」「六恨」を重視して、彼の彌陀信仰への轉移を述べている。そこには智顗の教相觀の底にあるもの、及び所謂業に關するものとが追究されていないのは、惜しまれるが、新しい見解として、智顗の眞面目を追求する基礎を提供するものとなろう。

何はともあれ、本書は行き詰まれる感のある天台學に對して、新しい展開をもたらすものとなり、他の分野のものも一讀を要するものである。

（A5、四二八頁、昭和三四・一〇・一〇・法藏館發行、千圓）（濱田耕生）

H. V. Guenther: The Jewel Ornament of Liberation

14.5×23cm, XIV+333p, London, 1959.

Herbert V. Guenther 博士は先にラクノー大學に在り、近頃、新設のベナレス・サンスクリット大學の助教授として比較哲學を講じている。

この書は、チベット佛教古派の一つカギュ派 bka' rgyud pa の祖師ガンポパ Sgam po pa の著 dam chos yid bźin gyi nor bu thar pa ren po che'i rgyan ṣes bya ba theg pa chen po'i lam rim gyi bśad pa (saddharmacintāmaṇimokṣaratnālaṃkāra nāma mahāyānapathakramabhāṣyā), すなわち、「正法如意寶珠解脫寶莊嚴と名づける大乘の道の次第の解說」をチベット原文より英譯し註釋と索引とを附したものである。

原著の容量は、譯者の用いたブーターンにて刊行の木版本にして、一二六葉。その內容は二十一章に分たれている。

譯者はかつてこの書の第一章のみの試譯を發表した (JAOS Vol. 75, No. 2, April-June 1955, pp. 90-96) が、今回は全譯を完成し、第一章の譯文にもかなり推敲訂正のあとが見える。

ギュンター教授は、チベット學の現狀について云う。"Tibetan studies have been concerned with either the history and languages of Tibet proper or with a comparison of Sanskrit texts with their Tibetan translations or with an attempt to restore lost Sanskrit texts from Tibetan translations, but so far no research has been done with respect to the contribution to and application of Buddism *by the Tibetan themselves*. A few names of more important tea-

chers and their disciples are known from historical works, but none of their works have been edited or translated." (JAOS Vol. 75, No. 2, p. 90)

ツォンカパの主著 Lamrim に對する中國の法尊師・わが長尾教授らの業績をしばらく措けば、この言はおそらく妥當であろう。殊にツォンカパ改革以前の古派の教義學書については原典の刊行や飜譯のなされたことを知らない。"yet," とュ教授は續けていう "a study of their (=those Tibetan authors') works would greathy increase our knowledge about Buddhism as a living power and make us grasp the practical side of this doctrine which is as much important for an understanding of cultural developments as are the more abstract and theoretical aspects as preserved in the Sanskrit texts that have come down to us." 教授がここにガンポパによる佛教綱要ともいうべきこの書を飜譯紹介しようと意圖したのは、そのような事情による。

原著者ガンポパ (1079—1153) は、また Dvag po lha rje, 'dzam gṅin grags pa, lha rje bsod nams rin chen, Zla 'od gsoṅ nu などの名でも知られる。幼時、醫藥の法を學んで奥儀に達したが、若くしてその妻を失つたことから出家求道の生活に入つた。はじめ、カダム派を學びアティシャより傳承の教えを奉じたが、のち、ミラレパに會つて、金剛乘の行法を修することとなつた。これによつて彼は、顯教的性格をもつたカダム派の學流と、密教的實踐的色彩に富んだミラレパの學流との二流を綜合して (bka' phyag chu bo gñis 'dres) カギュ派の祖となつた。彼の著作には常に經釋とタントラの實踐との融合が見られる。

この書「解脫寶莊嚴」はガンポパの代表的な著作の一つで、"a complete course in Buddhist spiritual education" を内容とし、現在もなおカギュ派に屬するラマや在家信者らに最も尊重愛讀せられるものであるという。一口にいえば、簡略な佛教教義綱要であるが、その特色は、第一に、敍述が明快でかつ常に佛教的生活の實踐に卽していていたづらな思辨に陷らない。第二に、諸大乘經論より の引用が非常に多くて、寂天の Śikṣāsamuccaya を思わす程である。そして、第三に、譯者は、この書がチベット佛教の古典の中で Lam-rim という標題をもつタイプの書として最初のものであり、後のツォンカパの Lam-rim もその傳統につらなるものである、ということを指摘している。

この書では、無上正等覺の内容が六つの相において說き示される。すなわち、因 hetu・所依 āśraya・緣 pratyaya・方便 upāya・果 phala・現行 samudācāra である。正覺を獲る因となるのはすべての有情の内に存する Buddha-motive すなわち如來藏 Tathāgata-garbha である (第一章)。正覺の獲られる所依たるものは、われわれ有情の個體的生存、すなわち機、である (第二章)。その機をしてさとりに至らしめる緣となるのは善き道の友、善知識 kalyāna-mitra である (第三章)。さとりに至る手段、方便、とはその善知識による教示であつて、それは、凡そ四つの項目において示される。すなわち、(1) 一切有爲法の無常・刹那滅なることを知らしめられることによつて、

sensuous experiences に對する執着を離れる(第四章)。(2)われわれの沈淪する生死輪廻の vicious なることを知らしめられることによつて sensual pleasure に對する執着を離れる(第五章)。その生死輪廻なるものはすべてわれわれ自身の業の果に外ならない(第六章)。(3)慈と悲とをはげましめられることによつて自己滿足に對する執着を離れる(第七章)。そして、(4)正覺を獲るための十二の要目を知らしめられることによつて、さとりに至る方法についての無知を離れる。正覺を獲るための十二の要目とは、(a)大乘の行者として、三寶に歸依し無上道に發趣した機(第八章)と、(b)利他の行を成ぜんがために無上涅槃を希う願と、(c)凡夫より覺者に至るまでの種々な段階と、(d)發起した願の到るべき範圍——すなわち、その深さは無上菩提に達するまでその廣さは一切有情のすべてに利益の及ぶまで——と、(e)その菩提心を發する動機となるものと、(f)發心する場所と(g)發心作願の仕方——佛陀に對する禮拜・自らの惡行に對する懺悔・他の善行に對する歡喜讃嘆・諸佛に對して一切衆生を導き終るまで涅槃に入らぬようにその希願・一切衆生に對する自らの過去の善業の廻向・ひとすじに利他行につくし佛道を成ずべしとの起誓・三寶頂禮と發願に伴う自らの心の喜悅の觀察など——と、(h)發心作願の效顯と、(i)發心の退轉によつて墮する結果と、(j)發心を放棄する因となるものと、(k)一旦放棄したものが再び發心に向う要因と(以上第九章)、(l)發心した後の修練——願の憶持(第十章)と六波羅蜜の行(第十一—第十七章)—と、である。かくして大乘の行者は、資糧・加行・見・修・無學の五道(第十八章)によつて、十三の階程(資糧道位・加行道位・歡喜地乃至法雲地の十菩薩地・佛地)を歷て(第十九章)、果たる等正覺身(samyaksaṃbuddhakāya)に至る(第二十章)。その等正覺者の現行、すなわち Buddha-activity, は無緣の大悲をもつてする利他の行である(第二十一章)。

先に述べたようにこの書には諸經論からの引用が無數になされている。明確に原經論の名を擧げて引用している回數だけを數えても、入菩提行論より三十三回菩薩地より三十回、大乘莊嚴經論より二十八回、Ratnāvalī より十七回、Prajñāpāramitāsaṃcayagāthā より十三回、究竟一乘寶性論より十一回、俱舍論より八回、十地經・入法界品・涅槃經・密友書(Suhṛllekha)より各六回、等々、がある。

譯者は、この書を英譯するに當つて、術語の英語化にはすこぶる考慮をはらつて特殊な譯語を用いている。たとえば、チベット語の śes rab, 梵語の prajñā, は、通常譯されるように 'wisdom' としては不十分であるとし、「慧謂擇法」なのであるから、"prajñā, therefore, is really 'discrimination,' which in Webster's 'Dictionary of Synonyms' means 'the power to select the excellent, the appropriate and the true'."であるといい 'discriminating awareness' と譯す。ñon mons pa, kleśa, は affliction でも depravity でもなく、conflicting emotion であるという。また、hetu を necessary condition, pratyaya を sufficient condition と譯すのは 'only approximately correct' であつて、

'While pratyaya corresponds to what we call relation, hetu is a determinative sort of immanent teleology or directed control' である、という。菩提心 bodhi-citta は 'Enlightened Attitude' と譯される。菩提心を發すとは to prepare one's mind for an attitude which is directed towards and centred in enlightenment に外ならないからである。

しかし、五蘊の一たる rūpa（十二處・十八界の一たる色でない）を 'colour-shape' としたり、思〔業〕（cetanā）を 'motivation' としたのに對して思已〔業〕（cetayitvā）を 'motivatedness' としたりするような、明かな誤譯も見える。チベット語 byaṅ chub sṅiṅ po を 'the very quitessence of enlightenment' と譯すのもこの語が梵語 bodhi-maṇḍa（菩提道場）の譯語なのであるから問題であろう。

尤も、飜譯にあたつては常にチベット文を尊重し、必ずしも、梵文を藏文に置き替えて理解する、という仕方を執らなかつた、とは譯者自らのいうところである。殊に、引用文の箇處において、それの相應文が現在梵文テキストの中に見出され、かつその梵文とチベット文テキスト中の引用文との間に多少の相違があるような場合、譯者はチベット文を梵文で訂正することを避け、飽くまで原著者ガンポパ所引の文態を存している。それは譯者が、どこまでもチベット佛教プロパーの一作品としてこの書を取扱つて行こうとしているからである。

譯者は各章の內容を更にこまかに分科し、數字及び符號によつてそれを明快に示している。この分科の仕方はほとんど完全で、はなはだ讀者の理解を助ける。

數ある引用文の多くは譯者によつてその出典の卷數や丁數が示されている。譯者の博搜の勞を多とすべきであるが、われわれも漢譯佛典を參照して譯者のもとめ得なかつた出據のいくつかを示すことができよう。例えば、譯書一〇〇頁の涅槃經からの引用は曇無讖譯にして卷八、如來性品に「如是歸三寶　則得無所畏」とあるし、同二〇八頁の華嚴經からの引用は實叉難陀譯にして卷五十四、十地品に「三界所有唯是一心」とあるのに相當すると思われる。（櫻部建）

俳諧關係新刊書について

芭蕉文集（日本古典文學大系第四六卷）（杉浦正一郎・宮本三郎・荻野清校注）。「紀行・日記」「俳文」「評語書簡」の三部にわかれ、第一部には「野ざらし紀行」等の紀行文と「嵯峨日記」、第二部には「銀河の序」等七一の文章、第三部には「貝おほひ」等の評語類と書簡一四七通が收められている。文には、すべて解說がついており、上欄に詳しい校注が施されている。（A5版、五五四頁、三一四年十月刊、六五〇圓、岩波書店）。**芭蕉辭典**（飯野哲二編）。芭蕉に關する百科辭典である。本篇は、「出典」「語法」「語釋」「句解」「人名」の五部にわかれ、「出典」では芭蕉の作品の生れた典據を明らかにし、「語法」では芭蕉獨自の語法を解說し、「語釋」「句解」では重要な語、主な句の解釋をなしている。「人名」の部では芭蕉と關係のあつた人々について說明している。附錄として、「芭蕉作品集」「芭蕉研究文獻資料」「芭蕉關係書解題」「芭蕉年譜」がついている。（B6版、七三四頁、三四年九月刊